

片瀬の老舗を訪ねて⑫ 「片瀬写真館」①

今回は、江ノ電江ノ島駅から江の島へ続く洲鼻通りにある「片瀬写真館」をお訪ねしました。大正2年(1913年)創業から111年目を迎える、藤沢市内で最古の写真館です。



片瀬写真館のレトロで趣のある看板。
国内でも「写真館」という名称は少なくなっているそうです。

写真館の歴史を伺うため、3代目の熊谷美波さんをお訪ねしました。



3代目
熊谷美波さん

写真館を創業するまでのお話や、片

瀬や江の島の珍しい写真を沢山見せていただきました。また、貴重な写真の掲載を快諾して頂いたので、街の文化遺産といっても過言ではない「片瀬写真館」について創業以前から関東大震災まで、震災から第二次世界大戦、戦後から現代までの3回に分けてご紹介いたします。



ショーケースには、写真館で撮影された、素敵な写真が飾られています

写真館を創業したのは熊谷治純さんです。治純さんは横浜の貿易商の家庭に育ち、慶応在学中、当時は新しかった技術である写真に興味を持ち、縁のある片瀬に開業しました。当時は珍しかった写真の研究だけではなく、印刷・出版事業も行い、絵はがき、江の島片瀬の案内書など多くの出版物を出していました。その中に、現在も各地の博物館で展覧会が開かれている、鳥瞰図

で有名な吉田初三郎を自宅に逗留させて作成された江の島・片瀬の絵図があります。

また、大正10年当時は珍しかったラジオの研究もされていきました。

ラジオの試験放送が大正14年とされているので、先進的な感覚をお持ちだったことが窺われます。



ラジオ受信機の前熊谷治純氏(手前)



大正6年 片瀬写真館発行の江の島名所絵図

そして、大正12年9月1日、関東大震災が発生しました。その時、治純さんは、家族を龍口寺の裏山へ避難させた後、カメラを担いで箱根まで行きました。道々で見かけた被災の様子を撮影した写真が震災を記録した、現在貴重な資料となりました。

閑話休題

治純さんの祖父にあたる熊谷伊助さんは幕末にペリーと井伊大老との間に通訳として活躍し、ペリーより名刺代わりに自筆のサインの入った写真を受け取ったという、写真にまつわる驚くような逸話も写真館で伺いました。



江の島道をめぐる 番外編

「横穴墓(おうけつぼ)」

さて前回、現在のミネベアミツミの工場一帯が片瀬太源太遺跡と呼ばれる縄文時代から平安時代にかけての遺跡であり、そして東側の新林公園周辺には横穴墓と呼ばれる横穴式の墓が見つかっているというお話しをしました。そこで今回は江の島道からやや脇道にそれますが、その横穴墓について紹介します。

横穴墓は丘陵の斜面や崖を利用してトンネル状に掘り込んで洞窟のように仕上げ、その奥に遺体を安置した埋葬施設です。明治時代中頃に埼玉県の吉見百穴(よしみひゃっけつ)が調査され、これが穴居か墳墓かという論争があつたようですが、資料の蓄積により明治時代末には墳墓説が定着していったようです。

横穴墓は5世紀後半以降8世紀くらいにかけて作られたようで、全国各地に分布して、神奈川県内でも多く見つかっています。その中でも、川名から片瀬地区にかけての片瀬山山腹では多くの横穴墓があることは知られていて、新林小学校建設や共同住宅建設に伴い発掘調査され、100基を超える横穴墓が見つかっています。

横穴墓はもともと盗掘されているのがほとんどで、開口しているのその存在が認識できるわけですが、新林小学校建設に伴う調査では、盗掘を受けていない状態で横穴墓1基が発見され、多くの貴重な副葬品が残されています。中でも金銅製の鳳凰を模した柄頭を持つ環頭太刀(かんとうたち)も含まれていました。



環頭太刀 (かんとうたち)

またこれらの横穴墓の内、川名の神光寺(じんこうじ)脇にある横穴墓群は藤沢市の史跡に指定され、保存されており、現在もその姿を観ることが出来ます。実は片瀬龍口寺の境内にある御霊窟、日蓮が龍ノ口法難の際に閉じ込められた土牢として今日でも信仰の対象ですが、その形態から横穴墓を改変したものであるようです。また、岩谷不動尊境内では、遺体を安置するため一段高く築かれた横穴墓の高棺座(こうかんざ)が須弥壇(しゆみだん)のように利用されているようです。かなり身近にお墓とは知られずに片瀬の方々の傍に横穴墓は存在していたのですね。まさに片瀬に歴史あり、です。



神光寺横穴

今回は『大地に刻まれた藤沢の歴史IV』古墳時代〜藤沢市教育委員会 2014年を参考にいたしました。

江の島は教材の宝庫⑦

「江の島灯台の光はどこまで届くのか」

江の島といえばシーキャンドルを思い浮かべる方も多いでしょう。夜には灯台の光が見えるかと思えます。条件の良い時は展望台から箱根の山々や伊豆大島などがよく見えることでしょう。

一方で、江の島灯台から照らされる光はどこまで届くのでしょうか。灯台の光が届く距離は「光達距離」と呼び、光の強さとあわせて公開されています。

光達距離は、光が強ければ強いほど伸びるのですが、もう一つ大切なこととして地球は丸いということです。海面から1mで光る場合は4km離れると水平線の下に没してしまいます。江の島灯台は江の島のほぼ頂上に建ち高さも約60mあるので条件は良いです。光の強さと灯台の高さを勘案した計算式によって求められ、その光達距離は46kmとされています。46kmがどれくらい距離か、国土地理院の地図に円を描いてみました。相模湾をカバーするようです。理論値なので実際の見え方は異なりますが、房総半島の洲崎から江の島灯台の光が見えたらで実際の見え方は異なる

りますが、房総半島の洲崎から江の島灯台の光が見えたら面白いなと想像してしまいました。

著 鹿兒嶋 英克



私の散歩道

コロナ禍が過ぎ、片瀬界限でも観光客を多く見かけるようになった。江ノ電もなかの扇屋さんの前でも多くの方が江ノ電の写真を撮られている。ふと、扇屋さんの前から江ノ電が走るのを見たら、奥に富士山が。毎日その前を通っていても、全く知らなかった。

皆さんも晴れた日に一度ご覧になってみては。(M)



ふるさと片瀬〜今昔あれこれ④

中村 喬

「子どもの頃の東り町」

子どものシャツの繕いをしてる母親から「まりやに行つてボタンと糸を買つてきて」と頼まれて走った。「まりや」という店の名前がいつまでも心に残っている。戦後の昭和の暮らしの話である。父親の晩酌のつまみに鱈の酢の物をつくろうとすれば江の島沖でとれた鱈を丁寧におろしてくれる魚屋があった。魚屋だけでなく、八百屋も酒屋も肉屋も米屋も乾物屋もパン屋もタバコ屋も豆腐屋も薬局も牛乳屋も軒を連ねていた。日常の暮らしの買い物は東り町の商店街で用が足りた。文房具を商う店もあった。そういえば葬儀屋もあったような気がする。

子どもの頃よく腹をこわした。怡幅のいい内科のお医者さんが聴診器を当てて薬を処方してくれた。すぐによく変わった。通りを少し外れたところには歯科の医院も外科の病院もあった。この通りがかつての江の島道であり、地域のメインストリートであったことはよく知られている。泉蔵寺、密蔵寺、本蓮寺、常立寺と古刹が並んでいる。今市民センターが置かれている場所には役場があった。郵便局もあった。郵便局が移転したことはまだ記憶に新しい。

また、この通りには手に職を持つ職人さんが多く住んでいた。石屋、大工、建具屋、板金加工、染物屋、布団屋、経師屋などなど、優れた技術で地域の暮らしを支えていた。もちろん今も地域の住民のために活動を続けてくださっている多くの方々がいらっしゃる。頭が下がる。

そして、地域の高齢化が進む今、再び地域の商店街の活性化を目指す試みが色々と行われている。御用聞きが家々を回り、品物を届けてくれた昔が懐かしい。かつてと同じ姿に戻ることはないだろうが、新しい形の地域住民にやさしい商店街が育つてほしいと強く思う。

【戻り松見守る春の東り町】



令和6年1月屋下の東り町

道子

片瀬市民図書館からの「案内」

電話28-6935

《新刊案内》

「風に立つ」

柚月裕子

「恋か隠居か」

(新酔いどれ小藤次26)

佐伯泰英

「黒い絵」

原田マハ

「アウトサイダー上下」

ステイブ・キング

「夜明けを待つ」

佐々涼子

「一億円の大」

佐藤青雨

「一夜(隠蔽捜査10)」

今野敏

「ホットプレートと震度四」

井上荒野

「県警の守護神」

(警務部監察課訴務係)

水村舟

「旅の人島の人」(増補版)

俵万智

「ウーウエンの蒸しものお粥」

ウー・ウエン

「出雲・松江石見銀山」

境港鳥取 24

(おとな旅プレミアム)

「るるぶシンガポール」 25

「るるぶ奄美・屋久島」

種子島 25

のぞいてみよう！公民館

「片瀬だより」

今回は公民館報の「片瀬だより」をご紹介させていただきます。

片瀬だよりは、6月・9月・12月・3月の年4回発行してします。2回から3回の編集会議を経て、地域の情報をお届けしています。

編集委員さんは、博識で穏やかで優しく、お話も楽しいので編集会議は脱線してしまうこともしばしば。 「ふるさと片瀬」の中村先生には当初10回ほどの連載をお願いしていましたが、気づけば43回。

先生の温かい文章と奥様の優しい絵。お二人の人柄が感じられる連載にはファンも多く、片瀬だよりの目玉となっています。市内に13公民館ありますが、公民館報は片瀬のみになりました。少しでも長く地域の皆様に、片瀬の情報を届けたいという祈るばかりです。



編集後記

元旦に起きた能登半島地震は、日がつたにつれて身につまされる。「天災は忘れた頃にやってくる」の警句を忘れるなど痛感している。

とはいえ、春の陽ざしに緊張はほぐれて、見頃の桜はどこか、タケノコは未だかと暢気な会話が日常にある。新入生が賑やかに一団で通学する。自ずと笑みがこぼれてきた。(〇)